

香芝市文化財調査報告書 第2集

# 逢坂城跡第1次発掘調査報告書

—中和幹線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2000.3

香 芝 市  
香芝市教育委員会編

## 例 言

1. 本書は、奈良県香芝市穴虫855, 865, 867, 869, 864の一部, 866の一部, 868の一部, 168-1の一部外に所在する逢坂城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、香芝市を事業主体とする中和幹線建設事業を契機として香芝市教育委員会事務局生涯学習課 香芝市二上山博物館が実施した。
3. 発掘調査期間及び調査総面積は下記のとおりである。  
平成11年2月1日～同年6月19日 調査面積 1,769㎡
4. 調査は、下記の組織で実施した。
  - (1) 現地調査  
香芝市教育委員会事務局 生涯学習課 香芝市二上山博物館
  - (2) 事務  
香芝市都市整備部中和幹線促進課
5. 本書の挿図の座標値は国土座標第Ⅵ座標系による。また、標高は海拔高で示している。
6. 発掘調査に関する遺構や遺物の写真・図面等の調査記録一切及び出土遺物は、香芝市二上山博物館（奈良県香芝市藤山1丁目17-17）内で保管している。
7. 現地調査及び出土遺物の検討、岡氏関係年表作成等の本書作成に関しては下記の方々より有益な御教示を戴きました。御芳名を記して感謝の言葉にかえさせていただきます。(50音順。敬称略)  
川村和正、金松誠、小泉俊夫、二之部裕子、藤岡英礼、本村充保、山川均、山上豊

## 本文目次

I. 調査の契機と経過	1
1. 調査の契機	
2. 調査の経過	
II. 位置と環境	3
1. 地理的環境	3
(1) 地質	
(2) 条里	
2. 歴史的環境	4
3. 岡氏の動向について	11
(1) 岡氏について	
(2) 文献史料からみた岡氏の動向	
(3) 岡氏と逢坂城跡	
(4) 岡氏と香芝市内の城郭関連遺構	
III. 検出遺構の概要	25
1. 層序	
2. 検出遺構の概要	
IV. 出土遺物の概要	35
1. 出土遺物の概要	
2. 出土遺物からみた逢坂城	
V. まとめ	38

## 図目次

図1 逢坂城跡位置図 (S = 1/20,000)	1
図2 逢坂城跡調査区配置図	2
図3 二上山麓周辺の地質 (註2 b 文献より)	3
図4 逢坂城跡周辺条里図 (S = 1/10,000)	5
図5 逢坂城跡周辺遺跡分布図 (S = 1/50,000)	7
図6 大和の国人分布図 (註1 a 文献より)	11
図7 大和の国人・城郭分布図 (註1 b 文献より一部改変)	13
図8 古文書に見る岡氏と逢坂城跡	14
図9 香芝市周辺の城郭関連遺構・環濠集落分布図	24
図10 第8・9調査区遺構平面図 (S = 1/160)	26
図11 第9調査区SD-10平面図 (S = 1/80)	27
図12 第11・12調査区SD-15平面図 (S = 1/100)	28
図13 逢坂城跡第1～7調査区遺構平面図 (S = 1/250)	29・30
図14 逢坂城跡第11・12調査区遺構平面図 (S = 1/160)	31・32
図15 逢坂城跡第14・15調査区遺構平面図 (S = 1/200)	33・34
図16 逢坂城跡出土土器 (S = 1/4)	37

## 表 目 次

表1 岡氏関連年表 15~22

## 図 版

- 図版1 1. 逢坂城跡周辺上空航空写真(北西上空から)  
2. 逢坂城跡周辺上空航空写真(南東上空から)
- 図版2 1. 逢坂城跡上空航空写真(北西上空から)  
2. 逢坂城跡上空航空写真(南東上空から)
- 図版3 1. 逢坂城跡上空航空写真(真上から)
- 図版4 1. 逢坂城跡上空航空写真(南東上空から)  
2. 逢坂城跡上空航空写真(真上から)
- 図版5 1. 逢坂城跡上空航空写真(北東上空から)  
2. 逢坂城跡上空航空写真(西上空から)  
3. 逢坂城跡上空航空写真(南西上空から)
- 図版6 1. 逢坂城跡上空航空写真(南上空から)  
2. 逢坂城跡上空航空写真(南上空から)
- 図版7 1. 逢坂城跡上空航空写真(真上上空から)  
2. 逢坂城跡上空航空写真(南東上空から)  
3. 逢坂城跡上空航空写真(北西上空から)
- 図版8 1. 調査地遠景(北から)  
2. 逢坂城跡より二上山・ヘモンド壘を望む(北から)  
3. 岡城より調査地(逢坂城跡)を望む(南から)
- 図版9 1. 第1調査区完掘状況(南西から)  
2. 第1調査区完掘状況(南東から)  
3. 第1調査区SD-10完掘状況(南東から)
- 図版10 1. 第2調査区完掘状況(南から)  
2. 第1・2調査区完掘状況(南から)  
3. 第2調査区西壁土層堆積状況(東から)
- 図版11 1. 第3・4調査区調査前伐採後の状況(南東から)  
2. 第3・4調査区調査前伐採後の状況(南西から)  
3. 第3調査区発掘調査の状況(北東から)
- 図版12 1. 第3調査区遺構検出状況(南西から)  
2. 第3・4調査区遺構完掘状況(南東から)  
3. 第3・4調査区遺構完掘状況(南西から)

- 図版13 1. 第3調査区遺構完掘状況（南東から）  
2. 第3・4調査区遺構完掘状況（南西から）  
3. 第3・4調査区遺構完掘状況（北東から）
- 図版14 1. 第3調査区SD-01完掘状況（北東から）  
2. 第3調査区SD-01土層堆積状況（南西から）  
3. 第3調査区土坑完掘状況（北東から）
- 図版15 1. 第6調査区調査前伐採後の状況（北西から）  
2. 第6調査区発掘調査の状況（北西から）  
3. 第6調査区完掘状況（南東から）
- 図版16 1. 第7調査区調査前伐採後の状況（西から）  
2. 第7調査区完掘状況（東から）  
3. 第7調査区北壁土層堆積状況（南から）
- 図版17 1. 第8・9調査区調査前伐採後の状況（北東から）  
2. 第8調査区完掘状況（北東から）  
3. 第8調査区SD-08完掘状況（南東から）
- 図版18 1. 第9調査区全景（南東から）  
2. 第9調査区SD-11・12完掘状況（南東から）  
3. 第9調査区北壁土層堆積状況（南東から）
- 図版19 1. 第9調査区SD-10遺構検出状況（北東から）  
2. 第9調査区SD-10完掘状況（北東から）  
3. 第9調査区SD-10完掘状況（南東から）
- 図版20 1. 第9調査区SD-10石列検出状況（北東から）  
2. 第9調査区SD-10石列検出状況（南東から）  
3. 第9調査区SD-10石列検出状況（南東から）
- 図版21 1. 第11調査区調査前伐採後の状況（北西から）  
2. 第11調査区遺構完掘状況（北西から）  
3. 第11調査区遺構完掘状況（南東から）
- 図版22 1. 第11・12調査区SD-15上層堆積状況（南東から）  
2. 第11・12調査区SD-14土層堆積状況（南東から）  
3. 第11・12調査区東壁土層堆積状況（北西から）
- 図版23 1. 第11・12調査区SD-15石列検出状況（南西から）  
2. 第11・12調査区SD-15石列検出状況（北東から）  
3. 第11・12調査区SD-15石列検出状況（北西から）
- 図版24 1. 第11・12調査区SD-15石列検出状況（南東から）  
2. 第11・12調査区SD-15石列検出状況（南東から）  
3. 第12調査区東壁土層堆積状況（南西から）

- 図版25 1. 第11調査区から二上山を望む（北東から）  
2. 第11調査区から第8・9調査区を望む（東から）  
3. 第12調査区東壁土層堆積状況（南西から）
- 図版26 1. 第13調査区調査前伐採後の状況（北西から）  
2. 第13調査区発掘調査の状況（北東から）  
3. 第13調査区完掘状況（北東から）
- 図版27 1. 第14調査区調査前伐採後の状況（北西から）  
2. 第14調査区完掘状況（北西から）  
3. 第14調査区完掘状況（北西から）
- 図版28 1. 第15調査区調査前伐採後の状況（南西から）  
2. 第15調査区完掘状況（南西から）  
3. 第15調査区完掘状況（北東から）
- 図版29 1. 第15調査区完掘状況（北東から）  
2. 第15調査区完掘状況（北東から）  
3. 第15調査区東壁土層堆積状況（北西から）
- 図版30 1. 第15調査区東壁土層堆積状況（北から）  
2. 第15調査区東壁土層堆積状況（北から）  
3. 第15調査区東壁土層堆積状況（北から）



香芝市の位置

# I 調査の契機と経過

## 1. 調査の契機 (図1)

調査は、中和幹線(大和都市計画道路3・3・1号)建設事業のため平成10年2月10日付で事業主体の香芝市(市長 先山昭夫)から発掘通知書が提出されたことに起因する。開発事業計画によると、周知の遺跡として認識されている逢坂城跡の所在する丘陵上の中央部を横断する形で道路が敷設されるため、丘陵の削平等の開発に伴う埋蔵文化財への影響は必至とみられることから事業担当課と協議を行い、遺構や遺物の有無確認のための発掘調査を実施することとなった。

## 2. 調査の経過 (図2)

開発事業面積は広範な面積に及び、かつ、工期の都合上緊急を要したため、濠跡や土塁、曲輪等の城郭関連遺構や火葬墓遺構の検出が予想される箇所(幅3~10m、長さ8~70m)の試掘調査区を計13箇所設定して遺跡の有無確認調査を実施した。

調査の結果、第8~10調査区で江戸時代中頃~後半の暮末に築造された石列や石組暗渠等を検出したため、当該箇所調査区域を拡張したが、それ以外では当初から予想されていた城郭や火葬墓等の存在を示唆する遺構や遺物は検出されなかったことから調査区域の拡張等の全面調査は実施せず、図面作成および写真撮影等の一連の記録保存の過程を経て発掘調査を終了した。

調査総面積は1,769㎡、発掘調査期間は平成11年2月1日~同年6月19日まで、現地での実質作業期間は80日を要した。



図1 逢坂城跡位置図 (S=1/20,000)

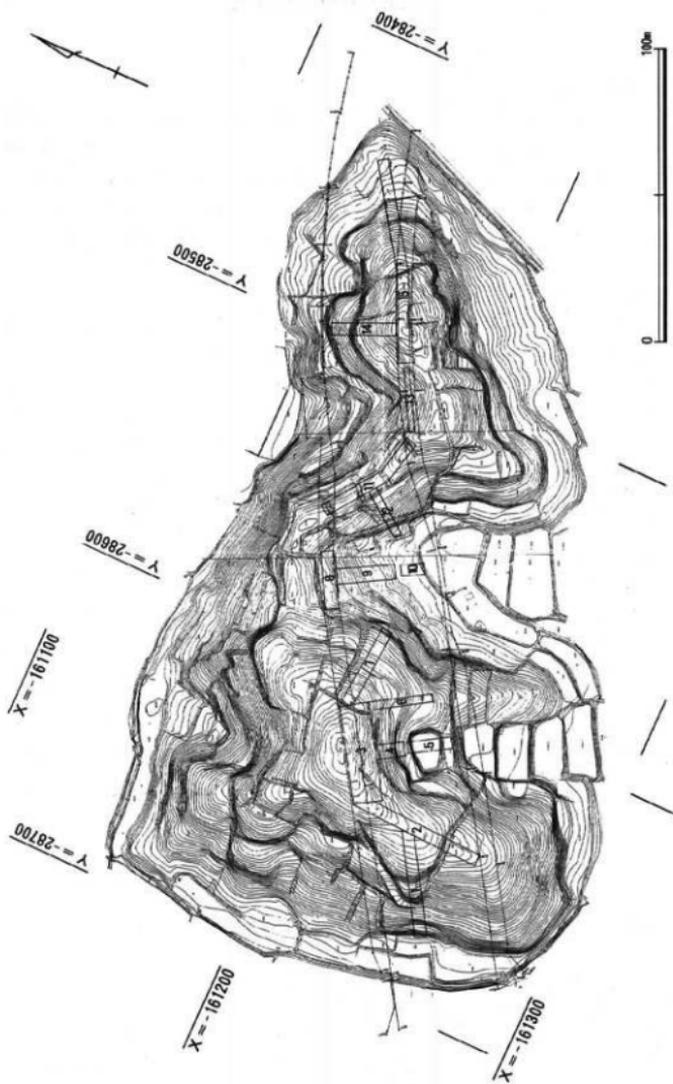


图2 逢坂城跡調査区配置図

## II 位置と環境

### 1. 地理的環境

#### (1) 地質 (図3)

香芝市は奈良盆地の西部、金剛葛城山地北端の二上山西麓に位置する。第三紀中新世に火山活動をした標高517.2m(雄岳)の二上山東部一帯に広がる扇状地の北部に市の中心部が立地する。

市域は24.23km<sup>2</sup>で、概ね、二上山北方の丘陵地域から成る西部の丘陵地域(「西部丘陵」)、大和川の一支流葛下川沿いに形成された沖積低地と二上山麓の緩傾斜扇状地(「二上山扇状地」)で構成

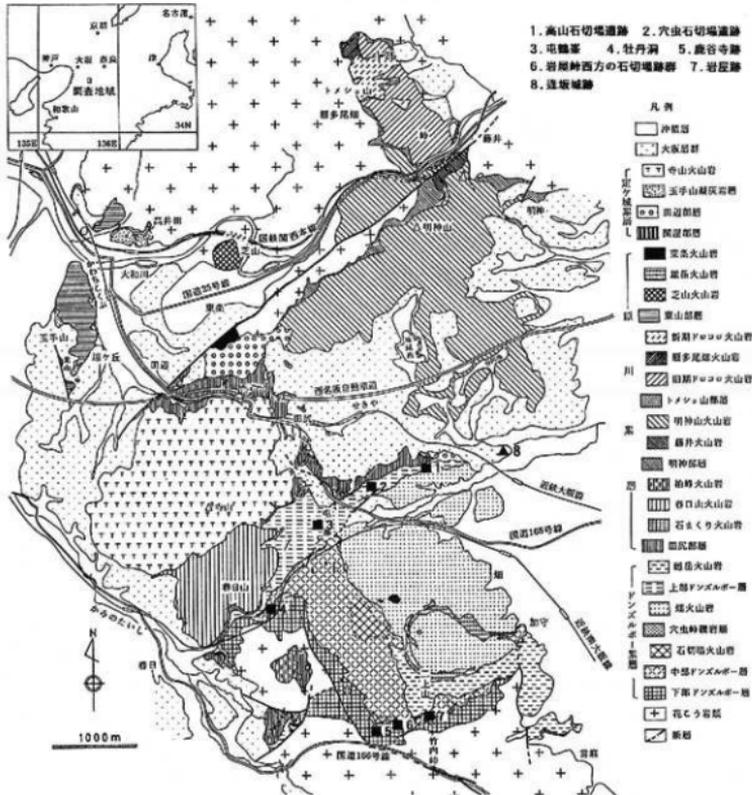


図3 二上山麓周辺の地質(註2 b文献より)

される中央部の低地（「中央低地部」、馬見丘陵の南西部に相当する東部の丘陵地域（「東部丘陵」）に概略地形区分される。このうち、開発区域の位置する西部丘陵は南側から二上層群のドンズルボー累層が分布する二上山の北麓裾部、下部大阪層群が堆積する関屋盆地、明神山火山岩で構成される明神山の南麓部に細分される<sup>3)</sup>。

地質的には、二上山周辺には、基盤である花崗岩の岩盤の上面に二上火山複合体を形成する地層である二上層群と河や湖に堆積した河湖層から成る古大阪層群が複雑に入り組んで分布しており、これらの地層は、大別して花崗岩、済岩、火砕流及び凝灰岩、河湖層の4つに区分される<sup>2)</sup>。

開発事業対象地域は、ドンズルボー累層中の上部ドンズルボー層や煙火山岩（火砕流堆積物）を始め、古大阪層群中の関屋砂層や瑞宝園粘土・礫互層の分布域に該当しており、逢坂城跡は古大阪層群中の関屋砂層上に立地する<sup>3)</sup>。

## (2) 条里 (図4)

逢坂城跡は葛下郡十八条に該当する。小字名は「ツハヤマ」で、付近一帯には城郭に関連する小字名はみられないが、逢坂城跡南東約600mには「城前」や「上井ノモト」、「マトバ」の小字名があり、堀跡らしき地割がみられることから当地が岡氏の平常時の居館跡とする説がある<sup>4)</sup>。

また、南約500mの「上山」には城郭関連遺構と推定されるヘモンド墨跡があり、さらに南西約1,500mの二上山麓の山頂部の「堂ヶ谷」には岡氏の築造とされる岡（畑）城跡が残る。

城郭関連遺構以外のものとしては、南西約70mの「ゴボ山」からは江戸時代の明和年間（1770年頃）に威奈大村の墓誌銘文入の金銅製骨蔵器（国宝）が出土したことが伝えられており、墓誌銘から当地は飛鳥時代は葛木郡山君里狛井山崗と称されていたようである<sup>5)</sup>。

## 2. 歴史的環境 (図5)

二上山はサヌカイトと凝灰岩、金剛砂の3つの石を産出することで知られている。サヌカイトは、数万年前の旧石器時代から2千年前の弥生時代に至るまで石器の原料として用いられ、凝灰岩は、古墳時代の石棺や石槨を始め、古代の寺院や宮殿の基壇等の建築用部材、中世には主に五輪塔等の石塔の部材として使用された。そして、金剛砂は近年まで研磨材の原料として使用されており、二上山の火山活動によってもたらされたこれらの自然の産物は、人類の知恵と技術の進歩とともに巧みに利用されてきた。二上山麓にはこれらの数万年間にも及ぶ人類の生産活動を物語る数多くの遺跡が残されており、多くの文化財が所在する奈良盆地の中でもとりわけ特異な様相を呈している。以下、逢坂城跡周辺を中心とした旧石器時代から中世までの香芝市内の主要な遺跡について概観することとする。

**旧石器時代** 二上山のサヌカイトが利用され始めたのは約2万5千年以上前にさかのぼると推定されている。二上山麓には、現在、70箇所をこえる旧石器時代～弥生時代のサヌカイト散布地が分布しており、近畿地方最大の石材原産地として知られている。旧石器時代の遺跡としては松ヶ丘第1地点遺跡<sup>6)</sup> (50) や日本最古のサヌカイト礫の採掘坑が検出された鶴峰荘第1地点遺跡<sup>7)</sup> (48) 等近畿地方を代表する石器生産遺跡がある。

**縄文時代** 旧石器時代から継続して、奈良盆地の中でも早い時期から縄文遺跡が残されており、縄文時代の石器生産遺跡としては、早期の押圧縄文土器片が出土した桜ヶ丘第1地点遺跡<sup>8)</sup> (50) が、前期の羽状縄文土器片（北白川下層式土器）が出土した鶴峰荘第2地点遺跡<sup>9)</sup> (49) 等がある。

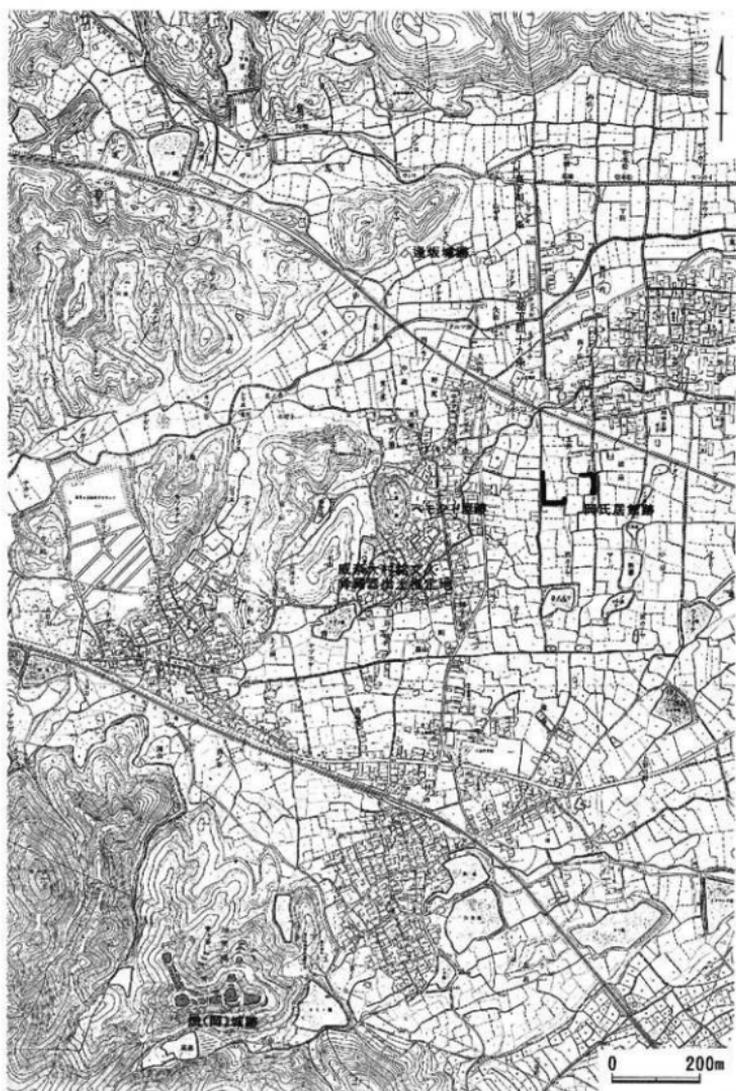


图4 逢坂城跡周辺地形图 (S = 1/10,000)

平野部の遺跡としては、早期の高山寺式土器が出土した下田東遺跡<sup>10)</sup>(21)をはじめ、後期の磨  
消縄文土器が出土した磯壁遺跡<sup>11)</sup>(36)や宮滝式土器が出土した瓦口森田遺跡<sup>12)</sup>(24)、晩期の突帯文  
土器が出土した鎌田遺跡<sup>13)</sup>(35)などが知られ、近隣の大規模な集落遺跡として当麻町の竹内遺跡<sup>14)</sup>  
(63)がある。なかでも狐井遺跡(34)第8次調査<sup>15)</sup>では縄文時代前期の北白川下層式~中期初頭  
の大歳山式期の土器片や石鏃、石匙、石鏝等の石器類、イノシシやシカ等の獣骨が大量に出土し  
ている。

弥生時代 弥生時代は、石剣や石槍を製作したと推定される田尻峠第1・2地点遺跡<sup>16)</sup>(45)やシ  
ル谷第1地点遺跡<sup>17)</sup>(47)などの石器生産遺跡がある。しかし、平野部において、遺構に伴うもの  
としては藤ノ木丁遺跡第7次調査(23)で土坑から後期の土器が一括出土しているほかは、鎌田  
遺跡第6次調査<sup>18)</sup>や市内数箇所の遺跡で中期~後期の数点の土器片が採集されているのみで、各  
遺跡の土器の包含量も希少であるが、隣接する上牧町では江戸時代の文化年間に観音山で発見さ  
れたと伝えられる小形の袈裟標文銅鐸<sup>19)</sup>(15)が知られる。

古墳時代 市内には約30基の古墳が確認されている。分布域は馬見丘陵南端部と藤山丘陵、志都  
美丘陵域、狐井台地などに分けられる。そのうち馬見丘陵南端部には中国製の札甲が出土した別  
所城山第2号墳<sup>20)</sup>(31)や別所石塚古墳<sup>21)</sup>(32)などの前期古墳が分布しており、狐井台地では古墳  
時代中期後半の全長140mの大型前方後円墳である狐井城山古墳<sup>22)</sup>(33)が存在する。

藤山丘陵域を中心とする地域では上中ヨロリ第1・2号墳<sup>23)</sup>(12)や藤山1・2号墳<sup>24)</sup>(17・18)、  
北今市古墳群<sup>25)</sup>(19)等の中期から後期にかけて小規模な古墳や古墳群が形成される。志都美丘陵  
域では平野車塚古墳<sup>26)</sup>(5)など終末期になって古墳の築造が始まる。平野塚山古墳<sup>27)</sup>(4)は一  
辺21mの方墳である。二上山から産出する凝灰岩製の切石を用いた整備な横口式石槨を有する。  
一方、二上山雄岳付近では一部に二上山産の凝灰岩製の家形石槨を転用した特異な横口式石槨を  
有する一辺約7.6mの方墳である鳥谷口古墳<sup>28)</sup>(60)がある。ともに古墳の数が減少する7世紀後半  
の終末期に築かれた古墳であり、当地域の政治的関係を考察するうえで重要である。

集落遺跡としては、藤山遺跡<sup>29)</sup>(16)で古墳時代後期と推定される掘建柱建物跡が数棟検出され  
ているほか集落遺構は未検出であるが、当麻町域と接する鎌田遺跡第6次調査では灌漑状遺構  
に伴う流路跡から古墳時代前期~中期の土器とともに大型建物に伴う建築部材が検出されてお  
り、付近に掘建柱建物で構成される大規模な集落の拡がりが見られる。

生産遺跡としては、古墳時代中期に至って二上山の産出する凝灰岩は近畿地方を中心に石棺用  
石材としての利用が始まり、古墳時代か否かは不明確ではあるが、穴虫石切場遺跡<sup>30)</sup>(44)やドン  
ズルポー西方の石切場跡<sup>31)</sup>(51)、岩屋峠西方の石切場跡<sup>32)</sup>(56)など数カ所で凝灰岩を切り出した石  
切場跡が分布するほか、古墳時代後期の須恵器や奈良時代の瓦を焼成した平野窯跡群<sup>33)</sup>(3)があ  
る。

古代 7世紀以降の古墳以外の遺跡としては、回廊状遺構が検出された奈良時代創建と考えられ  
る尼寺廃寺北遺跡<sup>34)</sup>(1)がある。当麻町域では凝灰岩製の石仏や埴仏が発見された石光寺<sup>35)</sup>(61)  
や塔と回廊などが検出された加守寺<sup>36)</sup>(53)などの奈良時代の寺院跡が存在するのを始め、二上山  
麓には凝灰岩の岩肌を彫り込んだ石窟寺院である岩原跡<sup>37)</sup>(57)や鹿谷寺跡<sup>38)</sup>(58)がある。



図5 逢坂城跡周辺遺跡分布図 (S=1/50,000)

1. 尾寺庵寺跡 2. 片岡城跡 3. 平野古窯跡群 4. 平野塚穴山古墳 5. 平野車塚古墳 6. 本辻城跡 7. 今泉古墳
8. 透迤山城跡 9. 七曜山城跡 10. 今泉遺跡 11. ガモ池遺跡 12. 上中ヨロリ第1・2号墳 13. 山口古墳 14. 額宗
- 塚古墳(塚墓) 15. 観音山銅鐸出土地 16. 藤山遺跡 17. 藤山第1号墳 18. 藤山第2号墳 19. 北今市古墳群 20. 法栗
- 寺山遺跡 21. 下田東道跡 22. 今池遺跡 23. 藤ノ木丁遺跡 24. 瓦口鼻田遺跡 25. 勘平山第1・2号墳 26. 長谷山
- 古墳 27. 坊主山古墳 28. 鈴山城跡(鈴山道跡) 29. 土山古墳 30. 別所城山第1号墳 31. 別所城山第2号墳 32. 別所
- 石塚古墳 33. 狐井城山古墳 34. 狐井遺跡 35. 鎌田遺跡 36. 綱壺遺跡 37. 岡氏府館跡遺跡 38. 「威奈大村」墓誌
- 銘文入金銅製管蓋器出土地 39. ヘモンド墓跡 40. 逢坂城跡 41. 高山火葬墓 42. 高山石切場遺跡 43. 穴虫火
- 葬墓(凝灰岩製石櫃出土地) 44. 穴虫石切場遺跡(田尻峠北方の石切場跡群) 45. 田尻峠第2地点遺跡 46. 田尻峠第3地点
- 遺跡 47. シル谷第1地点遺跡 48. 鶴峯荘第1地点遺跡 49. 鶴峯荘第2地点遺跡 50. 桜ヶ丘第1地点遺跡 51. ドンズ
- ルポー西方の石切場跡群 52. 岡城跡 53. 加守原寺跡 54. 加守金銅製管蓋器出土地 55. 二上山城跡 56. 岩屋峠西
- 方の石切場跡群 57. 岩屋跡 58. 鹿谷寺跡 59. 万歳山城跡 60. 鳥谷口古墳 61. 石光寺 62. 当麻寺 63. 竹内遺跡

また、二上山麓は火葬墓が集中する地域として知られており、金銅製の骨蔵器に471字の長文の墓誌銘を刻んだ国宝の「威奈大村墓」(38)をはじめ家形の凝灰岩製の石櫃を外容器とする奈良時代の穴虫火葬墓(43)や複数を合葬した高山火葬墓(平成10年度香芝市指定文化財)ほか、当麻町では金銅製の骨蔵器を有する加守火葬墓(54)などの飛鳥時代～奈良時代にかけての古代の火葬墓が集中して分布している。

このほか、所在場所は全く不明であるが、付近には『日本書紀』天武八年十一月癸に記された「大坂山」の開所跡の想定地があり、当丘陵城がその候補地の一つとする見解がある。

中世 穴虫や逢坂を中心とした二上山北麓一帯は、大和と河内を結ぶ交通の要衝という地理的環境から軍事拠点として重要視され、二上山麓の街道筋や集落を見下ろす山中や丘陵上には奈良盆地のなかでも多数の城郭関連遺構が築造される。いずれも築造・存続時期や城主等が不明なものが多いが、在地の土豪として中世を中心に、ほぼ現在の香芝市一帯を勢力基盤としていた岡氏の岡(畑)城跡(52)をはじめ、送迎山城(8)、七郷山城(9)、木江城跡(6)、ヘモンド城跡(39)、鈴山城跡(28)など市内の9箇所中世の城郭関連遺構が知られている。

逢坂城跡(40)もその一つであり、昭和50年に奈良県立権原考古学研究所が生駒郡三郷町内で実施した立野城跡の発掘調査の際に王寺町や香芝市付近一帯で城郭関連遺構の有無確認踏査が実施され、以後、奈良県教育委員会により周知の遺跡として認知されるに至った。

遺跡は、二上山北麓から北東方向に派生する標高約80～90m前後の独立した低丘陵地に立地しており、比較的緩傾斜面が多い、この独立丘陵城の全てが城郭跡として比定されており、当遺跡の西方約400mの二上山北麓の別峰には岡氏累代の城郭と推定されている岡(畑)城跡が所在するのをはじめ、南方約150mにはヘモンド城跡が、南東約150mには岡氏居館跡遺跡など多くの城郭関連遺構が分布する。調査前に実施した現地踏査では、明確な土塁や濠跡等の痕跡は確認できなかったものの、とくに、上述した城郭関連遺構をはじめ、古代の火葬墓等の検出が予想された地域である。

## 註 釈

- 1) 奈良県企画部開発調整課編 1984 『土地分類基本調査一奈良、大阪東北部、大阪東南部一』
- 2) a 横山卓雄 1992 「二上山はこうしてできた」『よみがえる二上山3つの石』二上山博物館展示解説、香芝市二上山博物館  
b 二上山地学研究会 1986 「二上層群の原川累層・定ヶ城累層の層序とサヌキトイドの活動時期」『地球科学』40-2、地学団体研究会
- 3) 前掲註2 b
- 4) 奈良大学城郭研究会編 1980 「岡城」『城』第9号 奈良大学城郭研究会
- 5) 奈良岡立文化財研究所飛鳥資料館編 1979 『日本古代の墓誌』
- 6) 松藤和人 1979 「二上山・板ヶ丘遺跡一第1地点遺跡の発掘調査報告一」奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第38号、奈良県教育委員会・権原考古学研究所編
- 7) a 奈良県立権原考古学研究所編 1985 「昭和59年度鶴塚荘第1地点遺跡第1次発掘調査概報」香芝町教育委員会

- b 奈良県立橿原考古学研究所編 1990 『昭和60年度鶴峯荘第1地点遺跡第2次発掘調査概報』  
香芝町教育委員会
- 8) 前掲註6
- 9) 香芝町教育委員会編 1990 『平成元年度鶴峯荘第2地点遺跡発掘調査概報』
- 10) a 小泉俊夫他 1980 『押型文土器を出した香芝町下田東遺跡(一)』『青陵』第46号  
b 吉田宇太郎 1929 『大和下田村出上の縄文式土器に就いて』『考古学雑誌』第19巻第4号
- 11) 松本俊古 1956 『先史時代の人々』『大和下田村史』下田村役場
- 12) 香芝町教育委員会編 1989 『瓦口森田遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会
- 13) 前掲註2 a 所収
- 14) 松田真 1989 『竹内遺跡』『奈良県遺跡調査概報1988年度』  
佐々木好直 1990 『竹内遺跡』『奈良県遺跡調査概報1989年度』  
関川尚功 1992 『竹内遺跡』『奈良県遺跡調査概報1991年度』
- 15) 香芝市教育委員会編 1993 『狐井遺跡の調査』『平成5年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』  
奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- 16) 香芝町教育委員会編 1989 『田尻峠—中和幹線事業にともなう発掘調査概報—』香芝町・香芝町教育委員会
- 17) 奈良県立橿原考古学研究所編 1982 『香芝町シル谷第1地点遺跡発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報  
1981年度』香芝町教育委員会
- 18) 香芝市教育委員会編 1994 『藤ノ木丁遺跡第7次調査』『香芝市埋蔵文化財発掘調査概報2』  
香芝市教育委員会
- 19) 香芝市教育委員会編 1992 『鎌田遺跡』『平成4年度奈良県市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』  
奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会
- 20) 小泉俊夫 1977 『先史時代』『上牧町史』上牧町役場編
- 21) 白石太郎ほか 1974 『馬見丘陵における古墳の調査』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第29冊、  
奈良県教育委員会
- 22) 前掲註21
- 23) a 泉森峻 1976 『古墳時代』『香芝町史』香芝町役場  
b 香芝町教育委員会編 1986 『昭和60年度狐井城山古墳外堤第4次調査概報』
- 24) 香芝町教育委員会編 1986 『旭ヶ丘Ⅰ』香芝町旭ヶ丘土地区画整理事業組合
- 25) 前掲註23 a
- 26) 前掲註23 a
- 27) 泉森峻・久野邦雄 1977 『竜門御坊山古墳付平野塚穴山古墳』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第32冊、  
奈良県教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編
- 28) 前掲註27
- 29) 佐々木好直・奥田尚 1984 『烏谷口古墳発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報1983年度』
- 30) 香芝町教育委員会編 1991 『藤山遺跡発掘調査概報』香芝町教育委員会
- 31) 前掲註19
- 32) 松田真 1982 『穴虫石切場遺跡発掘調査概報』『奈良県遺跡調査概報1980年度』奈良県立橿原考古学  
研究所

- 33) 奥田尚・増田一裕 1979 「古代の石切場跡その1」『古代学研究』第91号
- 34) 奥田尚・増田一裕 1981 「古代の石切場跡その2」『古代学研究』第95号
- 35) 千賀久 1977 「北葛城郡香芝町平野窟跡群発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1982年度』奈良県立橿原考古学研究所
- 36) 保井芳太郎 1932 「大和上代寺院志」大和史学会  
香芝市教育委員会編 1992 「尼寺庵寺北遺跡発掘調査概報」香芝市教育委員会
- 37) 河上邦彦 1992 「当麻石光寺と弥勒仏概報」奈良県立橿原考古学研究所・吉川弘文館
- 38) 近江俊秀他 1993 「加守寺院跡第1・2次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1992年度』
- 39) 堀江門也 1991 「岩屋」『図説日本の史跡古代2』、同朋舎出版
- 40) 堀江門也 1991 「鹿谷寺跡」『図説日本の史跡古代2』、同朋舎出版
- 41) 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館編 1979 『日本古代の墓誌』
- 42) 網下善教 1959 「北葛城郡香芝町穴虫火葬墓」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第12号
- 43) 香芝市二上山博物館編 1994 「高山火葬墓・高山石切場遺跡」香芝市教育委員会
- 44) 嶋田曉 1956 「北葛城郡当麻町大字加守金銅骨壺出土地」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第9号
- 45) 千田稔他 1984 「大坂遺と大坂山の間の比定試考」『竹内街道（二上山麓の道）奈良県歴史の道調査報告書』奈良県文化財調査報告第43集、奈良県教育委員会
- 46) 村田修三他 1980 「奈良県」『日本城郭体系10』新人物往来社
- 47) 前掲註46
- 48) 前掲註46
- 49) 前掲註46
- 50) 前掲註46
- 51) 奈良県立橿原考古学研究所編 1985 「昭和59年度鈴山城跡・鈴山遺跡発掘調査概報」香芝町教育委員会
- 52) a 前掲註46  
b 廣瀬常雄 1975 「立野城跡—生駒郡三郷町立野所在中世城郭跡の調査概報—」奈良県立橿原考古学研究所
- 53) 前掲註4



や「岡殿」の名が見られ、平田庄内当麻庄に賦課された本家の近衛殿御所造営料段錢も名主として負担上納している。

また、年次は不明であるが『金峯山免田田数注文』（天理図書館保井文庫）には、「北殿イソカベ」とあり、この礎壁の「北殿」は「南殿」に対してのものと考えられ、「北殿」も岡氏一族と思われる。応永14年5月付の「平田庄荘官請文」（『春日大社文書2』）には、八庄官の一員として「岡政種」の名が見られ応永期の惣領であったと思われる。

応永21（1414）年には足利義持の命により他の有力衆徒・国民らとともに上洛している。（『寺門事条々開書』）その後、嘉吉4（1444）年には越智方として筒井城を攻略するほか、しばしば興福寺の検断・発向に動員された（『経覚私要抄』嘉吉4年正月23日・文安4年9月14日「同3」康正3年6月19日条。「大乘院寺社雑事記1」康正3年6月20日条等）。文正元（1466）年、河内の畠山氏の内訌と関連して大和国人衆は義就・政長の両派に分かれて抗争するが、岡氏は義就・越智方に万歳氏らとともに属し、政長方の筒井・箸尾らを攻撃した（『大乘院寺社雑事記4』同年10月5日条）。続く応仁・文明の乱以降も同様で、岡氏は終始越智方（西軍）であった。国中地域では文明9（1477）年、越智方が筒井方を駆逐し、この時期岡氏の勢力は伸長したとみられる（『大乘院寺社雑事記7』文明11年10月4日・12年7月22日条）。

#### 戦国・織豊時代

延徳2（1490）年、この年は干魃に見舞われ、隣接する万歳氏と水論となり合戦となった。この時、岡氏には越智・箸尾・龍田・高田・畠山義就らと与力は大勢だったが、万歳氏には古市・佐川以下少なかった。この結果は、岡氏の勝利とする意見があるが、真偽は不明である（『大乘院寺社雑事記9』同年7月5日条・8月5日条）。越智氏全盛期であった戦国前期の明応2（1493）年5月、岡氏は管領として幕府の実権を握った細川政元のもとへ、越智家栄等とともに戦勝祝いを上洛している（『大乘院寺社雑事記10』）。明応7（1498）年、筒井順盛が越智・古市氏らに勝利し、翌8（1499）年筒井・越智の和睦が成立、永正2（1505）年には、古市氏を除く大和国人衆が起請文を春日社頭に捧げ誓いを固めているが、岡氏の名はこの中にはみられない。しかし、翌3（1506）年の安位寺（御所市大字御羅）の再建勸進奉加帳には有力国人11氏とともに「岡弥次郎政行」の名を連ねている（『多聞院日記1』同年3月15日条）。

永祿年間松永久秀が筒井氏を退けて大和を制圧すると、岡氏はこれに属した。永祿11（1568）年織田信長上洛のあと松永氏は信長を背景としたが、元龜2（1571）年に叛逆。その機に乗じて筒井順慶は攻勢に転じ、天正2（1574）年3月に筒井順慶が上洛した際に岡氏もともに上洛する。このとき信長から人質を求められるが拒否して帰国している（『多聞院日記2』）。

その後、天正5（1577）年「岡周防守」は信長より松永氏の所領を押さえるように求められ、その所領の百姓が松永氏に年貢を納めたり、また、松永氏に対して奔走すれば成敗する旨の朱印状をもらう（『大和岡周防守朱印状写』）。天正8（1580）年、信長が大和一国に指出しと城割りを命じた際、岡氏の石高は2000石であることが記載されている（『多聞院日記3』）。

また、「岡弥治郎正行」は春日社に石灯笼を献している（『奈良県史17』）。同年、「岡弥二郎」は信長の勸告を受け、場所は不明であるが「ヤケアト」で自害させられ岡一族は滅亡する。



図7 大和の国人・城郭分布図 (註1b文献より一部改変)

(2) 文献史料からみた岡氏の動向 (表1)

岡氏の動向については『香芝町史』や『奈良県史』第11巻に詳しい。しかし、知見の及ぶ限りで岡氏一族の盛衰・動向を年表として体系的に整理したものは、奈良大学城郭研究会発行の機関紙『城』第8号のみで詳細なものは少ない。

今回の逢坂城跡の発掘調査を契機に岡氏の動向を再検討し、岡氏の城郭名や城郭関連遺構の場所を探る目的も兼ねて従来の研究成果をもとに岡氏一族の関係文献史料を徹底的に検索・集成了した。

なお、年表の体裁として中には『和州諸將軍伝』や『畠山家譜』等とともに江戸時代の編著とされる史料も含まれているが、真偽はともかくとして一連の参考資料として同書が記す時期に年表中に列挙している。史料に見る岡氏の動向は以下の年表(表1)のとおりである。

期セン片時毛筒井ニ押寄せ一戦ニ勝負ヲ決シ筒井ノ城ヲ攻落サントテ和州ノ麾下逢坂ノ城主岡周防守橋國高古市ノ城主左近平景治菅田備前守藤原豊春高山主殿信貴山ニ入テ久秀ニ屬ス其後高槻城ハ高山右近城主ト成リ岡周防守逢坂ニ籠城シ海老名兵衛片岡城ニ立籠リ同助九郎ハ信貴城ニ歸入り森兵助ハ平野ニ歸城シ同藤

逢坂山城逢坂内記 服部平城 池田主殿  
 岡寄平城 岡崎周防 池田平城 池田主殿  
 万敷平城 万敷石京 二所四方搦跡在リ二上山モ山城有リ  
 高田山城 高田三河高田町北東二所四方搦跡有リ  
 布施太郎左衛門 寺口村ニ城跡有リ

『和州諸將軍伝』卷三

『大和郷土記』

図8 古文書に見る岡氏と逢坂城跡 (註6・7文献より)

表1 岡氏関連年表

西 曆	元 号	岡氏関係文献史料の概要	所 収 文 献
1192	建久3年	●源頼朝、征夷大将軍となり鎌倉に幕府を開く。	吾妻鏡
1195	建久6年	岡頼基、関東にいる一族を背景として、地頭と称して蓮花王院領大和国藤井荘に連乱を働いたので領家である蓮花王院が幕府に訴えたが、訴えは却下される。	
1196	建久7年	岡行西・貞常、鹿嶋社の宮座の頭人をつとめる。	法楽寺座衆帳
1212	建暦2年	同じく岡行西・貞常、鹿嶋社の宮座の頭人をつとめる。	法楽寺座衆帳
1221	承久3年	●承久の乱が起こる。	大乗院日記目録
1236	嘉禎2年	●幕府、大和に守護をおきすぐまた廢する。	
1243	寛元元年	岡殿、春日社の唯識論の御祈禱を御願する。	
1274	文永11年	●蒙古襲来する。(文永の役)	
1281	弘安4年	●蒙古襲来する。(弘安の役)	
1301	正安3年	●悪党等が春日社に乱入し、神鏡を奪う。このころ大乗院門跡郷に南市が開かれ一乗院門跡郷の北市に並ぶ。	
1304	嘉元2年	●幕府、興福寺衆徒の訴えで大和国内の地頭職をやめる。	
1320	元応2年	岡殿、市法師・乙熊二郎の入座を口添えする。	
1334	建武元年	●建武新政。	
1336	光明3年 (延元元年)	●室町幕府が開かれる。	
1351	観応2年 (正平6年)	●興福寺大乗院・一乗院両門跡門徒が争う。	
1378	永和4年 (天授4年)	●興福寺衆徒、十市遠慮討伐を強訴する。翌年、幕府大軍が下向する。	長川流鍋馬日記
1382	永徳2年 (弘和2年)	●春日社焼失。大乗院・一乗院両門跡が和睦する。	
1384	至徳元年 (元中元年)	岡氏、流鍋馬に勤仕する。	
1392	明德3年 (元中9年)	●南北朝合一。	
1399	応永6年	岡氏、興福寺供養料足段銭を納める。	大和葛下郡興福寺供養料足段銭取納注文
1401	応永8年	岡氏、興福寺別当の命により他の国民十二氏とともに南都に召集される。	寺門享々閉書
1407	応永14年	岡政種、他の平田庄七庄官とともに興福寺に段銭・段米を納めなかったので興福寺から強制的にそれを納めるべき旨を約束させられる。	平田庄庄官請文

西 暦	元 号	岡氏関係文献史料の概要	所 取 文 献
1414	応永21年	岡氏、他の官務衆徒や国民とともに幕府により京都に召集れ私合戦を停めること等を誓わされる。	寺門事条々問書
1415	応永22年	●幕府の伊勢国司北畠満雅追討軍を、宇陀郡で土一揆が襲う。	
1420	応永27年	岡氏、摂関家領平田庄庄官職、郡司職、新万歳職、同庄検断職、当麻庄半給主職、佐保田庄中司職や平田庄の佃同名五名などの得分を得ている。	一乗院方坊人用銭支配状
1429	永享元年	●筒井・十市方と越智・著尾方が全面対立する。 (永享大和合戦が始まる)	
1440	永享12年	●筒井・十市方の勝利で永享大和合戦が終わる。	
1441	嘉吉元年	●河内国守護畠山持国の援助で越智家栄が故地を回復する。	
1444	嘉吉4年	岡氏、幕府の下知により越智方として他の国民十五氏とともに筒井城を攻略。	経覚私要鈔1
1447	文安4年	岡氏、幕府から東大寺の今小路への出陣を命じられる。	経覚私要鈔1
1457	康正3年	岡氏・岡今井氏、一乗院家御坊人国民としてあげられている。	大乗院寺社雑事記1
1457	康正3年	岡氏、筒井方の番条氏と掌書院昌煥の退治に功があったので幕府から他の衆徒・国民二十二人とともに奉書をもらう。	経覚私要鈔3 大乗院寺社雑事記1
1458	長祿2年	葛下郡司岡氏は平田庄田率御油代銭の未進が続いたために神事・法会・大小諸役をすべて停止させられる。	大乗院寺社雑事記1
1466	文正元年	岡氏、大和国中に進出した畠山義就方として越智家栄等とともに畠山政長方の筒井順永等と戦う。	大乗院寺社雑事記4
1467	応仁元年	●応仁・文明の乱が起こる。大和も筒井方は山名宗全・畠山政長方の西軍、越智方は細川勝元・畠山義就方の東軍に与する。	
1475	文明7年	岡氏、越智の一門として名が見える。	大乗院寺社雑事記6
1477	文明9年	●筒井方没落する。	
1479	文明11年	岡氏、古市方として、大勢で筒井方を東山内の福住に追い返す。	大乗院寺社雑事記7
1480	文明12年	岡氏、越智氏等とともに畠山義就に河内国に召されて賞讃される。	大乗院寺社雑事記7
1482	文明14年	岡氏、平田庄田率御油代銭を三十貫請申したが十五貫に損免される。しかし、先年長谷に出陣して以来姿がないので滞る。	大乗院寺社雑事記7
1482	文明14年	岡方の納める平田庄田率御油代銭の得分を小日代以下が分配する。	大乗院寺社雑事記7

西 暦	元 号	岡氏関係文献史料の概要	所 収 文 献
1482	文明14年	岡氏、平田庄田率御油代銭三十五貫文を請申したが越智氏がその内の十五貫文を違乱したため免除を申す。	大乗院寺社雑事記7
1490	延徳2年	岡氏、万歳氏と水論となり合戦に及び大焼亡する(万歳の在所か)。岡の合力は越智・岩尾・龍田・高田・畠山義就で大勢であったが万歳方は古市・佐川以下少なかった。	大乗院寺社雑事記9 大乗院日記日録
1491	延徳3年	岡氏・(岡)今井氏、11月26日の春日若宮祭礼に願主人として流鏝馬を勤める者として記載される。	蓮成院記録
1491	延徳3年	岡氏・(岡)今井氏、吐田氏・豊田氏とともに初めて沙汰しなかつたので春日若宮祭礼の流鏝馬の競馬に参加できないようになる。	大乗院寺社雑事記10
1492	明応元年	岡氏、郡司として今年に入って初めて春日社に参勤する。本来一石だった布施を近年半分しか納めないようになる。	蓮成院記録
1493	明応2年	●細川政元、畠山政長を暗殺し、將軍足利義材を廃して新に義澄を將軍に擁立する。(明応の政変)	
1493	明応2年	岡氏、越智家栄等とともに足利義澄・細川政元のもとへ戦勝を祝いに上京する。	大乗院寺社雑事記10
1493	明応2年	岡氏、中村氏とともに、平田八住官の中で寺門反銭を納めたので改めて流鏝馬の願主人となる。	大乗院寺社雑事記10
1495	明応4年	岡氏のもとへ万歳弥九郎男と下田並びに三輪銅座が相論した際の後者勝訴の幕府の奉書が届く。	大乗院寺社雑事記11
1496	明応5年	先年の一件が解決しないため幕府は越智氏に成敗を任せる。	大乗院寺社雑事記11
1497	明応6年	岡氏、越智方として東山内(大和高原)より蜂起した筒井方の成身院・室来氏・超昇寺氏・山城衆と上三条・猿沢池の周辺の各地で合戦するが敗北する。(筒井方の復活)	大乗院寺社雑事記11
1498	明応7年	岡氏、越智方として片岡に籠もるが筒井方に落とされて没落する。	大乗院寺社雑事記11
1499	明応8年	●大和国人衆の間に古市氏を除いて和陸の動きができたが多武峯の反対によって実現せず。	
1499	明応8年	●細川政元の内衆の赤沢朝経が大和に入り、筒井順盛等を誅り奈良に転戦、法華寺・西大寺を焼く。	
1502	文龜2年	●赤沢朝経、大和社寺領を乱す。	
1505	永正2年	●古市氏を除く大和有力国人衆、起請文を春日社頭に捧げて和陸を誓い合う。	
1505	永正2年	●一両一正衆、前記起請文に連判する。 (第一期大和国人一揆体制成立)	

西 曆	元 号	岡氏関係文献史料の概要	所 取 文 献
1506	永正3年	岡弥次郎正行、安位寺の再建勳進奉加の交名に越智・筒井・十市等、有力国人十一氏とともに名を連ねる。	多聞院日記1
1506	永正3年	●国人一揆衆、古市方と手を結ぶ赤沢朝経の再度の大和侵入に対して応戦するも敗れる。	
1507	永正4年	●国人一揆衆、古市方と手を組む朝経の養子長経の大和侵入に対して応戦するも敗れて河内・大和・吉野等に身を潜める。	
1511	永正8年	●畠山尚順・同義英の争いが再発し、筒井方は前者に、越智方は後者について争う。 (第一期大和国人一揆体制崩壊)	
1520	永正17年	●古市方を除く筒井・越智方の和隆が成立する。 (第二期大和国人一揆体制成立)	
1528	享祿元年	●柳本賢治、古市公胤の手引きにより大和に侵入し、国人一揆の安定が崩壊する。	
1532	天文元年	●大和で一向一揆が起り、興福寺が焼失する。	
1536	天文5年	●木沢長政、大和に侵入して大和を支配する。	
1542	天文11年	●木沢長政、河内国太平寺にて敗死する。	
1543	天文12年	◆岡周防守、大和に侵攻した松永久秀に服従する。 (多聞院日記によると松永久秀が大和に侵攻するのは永祿2年(1559)なのでこの記載は誤りである)	畠山家譜11
1543	天文12年	●筒井順昭、須川城を陥れ、古市とも争う。 (第二期大和国人一揆体制崩壊)	
1543	天文12年	◆岡周防守、松永久秀の配下として名を連ねる。 (多聞院日記によると松永久秀が大和に侵攻するのは永祿2年(1559)なのでこの記載は誤りである)	和州諸将軍伝1
1545	天文14年	●十市遠忠が没し、十市氏は筒井の傘下に入る。	
1545	天文14年	岡殿、率川社の造替で五百文の段銭を納める。	率川社造替方納下算用状
1546	天文15年	●筒井順昭、越智氏を傘下に収める。	
1547	天文16年	●筒井順昭、著尾氏を傘下に収める。 (筒井順昭、大和国中及びその周辺を統一する)	
1550	天文19年	●筒井順昭没す。	
1551	天文20年	◆岡周防守・三好喜藏、それぞれ二上山に城を築く。	畠山家譜10
1554	天文23年	◆筒井藤勝(後の順慶)は郡山で響應し、その配下が「片岡ノ城」へも響請を望んだが、松永方の「志貴逢坂ノ敵城」が近いのでそれはやめて筒井に帰る。 (多聞院日記によると松永久秀が大和に侵攻するのは永祿2年(1559)なのでこれは誤りである)	和州諸将軍伝2

西 暦	元 号	岡氏関係文獻史料の概要	所 取 文 献
1559	永禄2年	●松永久秀、信貴山城から大和に入り国中を攻めたてる。	
1560	永禄3年	●松永久秀、屑間寺を西方へ移し、多聞山城を築き始める。	
1560	永禄3年	◆岡左衛門尉猶タダ、三好・松永方として九十六騎を率い、総勢千五百五十騎で畠山方の竜泉寺・金胎寺を攻めるも敗退する。	畠山家譜10
1563	永禄6年	●松永久秀、多武峯を攻め敗退する。	
1565	永禄8年	◆「邊坂ノ領主」岡周防守橋国高、同じく松永幕下の五位堂末次・下田夏村とともに二上の嶽に城を築き、岡周防守橋国高は播磨等の筒井方と柴井の西で戦うが敗退する。	畠山家譜11
1565	永禄8年	●松永久秀、筒井順慶の筒井城を陥れる。	
1566	永禄9年	●筒井順慶、多聞山城を囲む。	
1567	永禄10年	●松永久秀、筒井と組む三好三人衆を東大寺にて破る。この戦いによる兵火で大仏殿が炎上する。	
1567	永禄10年	◆岡周防守国高、松永の使いとして参上し、「多聞ノ城」に入る。	畠山家譜11
1567	永禄10年	岡因幡守、織田信長より將軍上洛のお供をするに際しての忠節と松永久秀に対し懇意になるべき旨がかかれた朱印状をもらう。	大和岡因幡守宛 朱印状
1568	永禄11年	●織田信長が入京。松永久秀を援助し大和の平定をはかる。	
1569	永禄12年	◆岡周防守橋国高、松永の配下として古市・菅田・高山等とともに「筒井ノ城」を攻め落とそうとする。	和州諸將軍伝3
1569	永禄12年	◆岡周防守、松永方として高山・古市等とともに千余人を率いて先陣をきり、総勢七千余人で法隆寺に打ち出る。	和州諸將軍伝3
1569	永禄12年	◆岡氏、法隆寺並松で松永方として古市・高山等とともに筒井方と合戦し両軍とも手負い・打死が多数でる。	和州諸將軍伝3
1569	永禄12年	◆岡周防守、高山・古市・松永右衛門・海老名等とともに法隆寺並松で筒井方の松倉氏が率いる千余人と合戦し、三千余人を切り崩される。	和州諸將軍伝11
1569	永禄12年	◆岡氏の属す松永方が先日の合戦に勝ち、「筒井ノ城」を手に入れ百八百余を実檢し、「信貴ノ城」で饗宴し、松永から感状及び太刀・長刀・駿馬・金銀・衣服等を与えられる。	和州諸將軍伝3

西 暦	元 号	岡氏関係文献史料の概要	所 収 文 献
1569	永祿12年	◆筒井順慶、宇多から筒井城を奪い返そうとして橋原右衛門に協力を求めたが、岡周防守と地迫合を始めているのでその余裕がないので断られる。	和州諸将軍伝3
1570	元亀元年	◆岡ノ周防守国高、松永の命により「橋原ノ城」を押さえる。	和州諸将軍伝3
1571	元亀2年	●松永氏、織田信長から離反する。(1回目)	
1571	元亀2年	◆岡ノ周防守国高、松永父子の命で馳せ参じ、松永の軍勢が一万余人の兵となる。	和州諸将軍伝3
1571	元亀2年	◆岡ノ周防守、松永父子の命で入江・鷹山等とともに二千の兵を添え分けられて「井土十郎太夫が城」を攻める。	和州諸将軍伝3
1571	元亀2年	●松永久秀、筒井方の辰市城を攻めるも大敗する。(辰市合戦)以後、松永氏は没落の一途をたどる。	
1571	元亀2年	◆岡ノ周防守、入江・高山とともに井土十郎太夫国秋率いる二百余の兵に城から出撃されて、岡氏等は百余人討たれて敗れる。	和州諸将軍伝3
1571	元亀2年	◆岡周防守、入江父子・海老名・森等とともに筒井方の二千五百余の兵に敗走する路をふさがれ合戦に及び、松永方三百余、筒井方百餘討ち死にともに引く。その後岡周防守は「逢坂」に籠城する。	和州諸将軍伝3
1572	元亀3年	◆岡周防守、織田信長の命で松永久秀とともに配下として入江・岩成や摂津・河内の配下とともに大坂光佐門跡に対する向城の定番となる。	和州諸将軍伝4
1572	元亀3年	岡氏、筒井方として筒井順慶・善尾為綱と各地に出兵して松永方と戦うが敗退する。	多門院日記2
1573	元亀4年	●松永氏、再度織田信長から離反する。(2回目)	
1573	元亀4年	●室町幕府滅亡。	
1573	天正元年	岡周防守、織田信長から近日上洛の時になお反旗を翻した松永氏に対して帰順するよう説得することを申しつけるという趣旨の書状をもらう。	大和岡周防守宛書状写
1573	天正元年	●松永久秀、多聞山城を織田信長に明け渡す。	
1574	天正2年	●筒井順慶、正式に織田信長の配下となる。	
1574	天正2年	●明智光秀、多聞山城の城番として入城する。	
1574	天正2年	岡氏、筒井順慶に連れられ高田・善尾氏とともに織田信長の上洛に際して上京する。	多聞院日記2
1574	天正2年	岡氏、織田信長より人質を求められるが善尾・高田とともに拒否して帰国する。	多聞院日記2
1574	天正2年	岡氏、織田信長の軍に河内から攻められ岡辺を焼かれる。	多聞院日記2

西 曆	元 号	岡氏関係文献史料の概要	所 収 文 献
1575	天正3年	●塙(原田)直政、織田信長により大和国守護に任命される。	
1576	天正4年	●筒井順慶、織田信長により大和国守護に任命される。	
1577	天正5年	●松永氏、織田信長に対して謀反を起こす。(3回目)	
1577	天正5年	◆片岡にいる岡ノ半右衛門久勝・岡周防守、織田信長に対し謀反した松永父子に与し、海老名友清等率いる千余人とともに「岡山上ノ城」に横籠る。	畠山家譜12
1577	天正5年	◆岡周防守、松永右衛門佐久通・岡次郎水種・入江・岩成氏やその他大和・河内・摂津・紀伊の松永氏配下の諸士等とともに、騎馬三百余を含む八千余の軍勢で「信貴山」に籠城し、近在を焼き払う。	和州諸将軍伝5
1577	天正5年	岡周防守、織田信長より松永氏の所領を押さえるよう求められ、またその所領の百姓が松永氏に年貢を納めたり、周防守等面々が松永氏に対して奔走すれば成敗するという趣旨の朱印状をもらう。	大和岡周防守宛 朱印状写
1577	天正5年	●松永父子、織田勢に信貴山城を攻め落とされ自害する。	
1577	天正5年	◆岡ノ周防守国高、他の松永幕下古市・高山・菅田等とともに所領を没収され牢々の身となり「和州山中」(大和高原)に蟄居する。 (多聞院日記によると岡氏が所領を没収されるのは天正8年(1580)10月28日以降と推定されるのでこの記載は誤りである可能性が高い)	畠山家譜12
1577	天正5年	◆岡周防守国高、他の松永方の古市・高山・菅田等とともに織田信長の命で所領を没収され牢々の身となり「大和国ノ山中辺土」(大和高原)に蟄居する。 (多聞院日記によると岡氏が所領を没収されるのは天正8年(1580)10月28日以降と推定されるのでこの記載は誤りである可能性が高い)	和州諸将軍伝5
1580	天正8年	岡弥治郎政行、春日社に石灯笼を献じる。	奈良県史17 金石文(下)
1580	天正8年	●筒井順慶、織田信長の命により摂津・河内・大和(郡山城を除く)の諸城の破却する。	
1580	天正8年	●筒井順慶、織田信長の命により大和一円の差出検地をする。	
1580	天正8年	岡氏の知行、差出検地の報告で二千石と記される。	多聞院日記3

西 暦	元 号	岡氏関係文献史料の概要	所 取 文 献
1580	天正8年	岡弥二郎、織田信長の命により「ヤケアト」で自害させられる。他に戒重・大佛供・高田氏も自害。岡へは瀧川一益が実検する。 (阿日寺境外の幕城内に岡弥治郎の五輪塔があり法蓋「實樹院春利宗信士」と刻まれている)	多聞院日記3  大和北葛城郡史 下巻
1581	天正9年	岡以下成敗された跡領は興福寺の寺門地に中分されていたが、去年の差出検地にその分を加えて出す旨を筒井順慶が使札を学侶へ送り、六方へも牒を送る。	蓮成院記録
1581	天正9年	岡弥二郎と祝言をあげる予定だった布施氏の娘が著尾氏と祝言をあげる。	多聞院日記3
1582	天正10年	●本能寺の変。	
1583	天正11年	●郡山城の天守が完成する。	
1584	天正12年	●筒井順慶没す。	
1585	天正13年	●筒井定次、伊賀上野城に国替。羽柴秀長が郡山城主になる。	
1587	天正15年	●奈良・郡山の座を禁止。羽柴秀長が奈良での味噌・酒・木材の商売を禁止、郡山で行わせる。十津川郷で検地を実施する。	
1591	天正19年	●秀長没す。養子の秀保が郡山城主となる。	
1592	天正20年	●朝鮮に出兵する。(文禄の役)	
1595	文禄4年	●増田長盛、郡山城主となる。大和惣国検地を実施する。(太閤検地)	
1597	慶長2年	●朝鮮に再度出兵する。(慶長の役)	
1600	慶長5年	●関ヶ原の戦い。増田長盛は追放され、大久保長安を大和国の代官とする。	
1602	慶長7年	岡周防守没す。(阿日寺境外の幕城内にある五輪塔による。法蓋は「高山院岡州雲峰宗松信士」と刻まれている)	大和北葛城郡史 下巻
1603	慶長8年	●江戸幕府が開かれる。	

※表の見方 ●印は日本歴史上や奈良県内の歴史上の主な出来事を表し、◆印は『和州諸將軍伝』や『畠山家譜』等の江戸時代編纂の文献による出来事を表す。

### (3) 岡氏と逢坂城跡 (図8)

表1のとおり、各文献には岡氏に関する記事が多数みられる。岡氏の本拠地や城郭を暗示する記事としては、いずれも江戸時代の編著であるが、『大和郷土記』に「逢坂山城 逢坂内記」という記事があるのを始め、『和州諸将軍伝』巻3の「逢坂ノ城主岡周防守備国高・・・周防守ハ逢坂二籠城シ・・・」、「畠山家譜11」に「二上の嶽に城を築く」等の記事がある。また、明治38年に刊行された『大和葛城郡史』下巻第4章「下田村史」に「逢坂城跡 逢坂ノ西南字城垣門ニ在リ逢坂氏は二摠ルト又畠山氏ノ摠ル所ナリト何レカ真ナルヲ知ラズ・・・」、同第9章「二上村史」に「畑城跡 大字畑大ジョウ川に在リ岡周防守之レニ摠ル・・・国高ハ逢坂城ニ籠レリ」とあり、逢坂城の存在と所在地が記されているが、「城垣門」という字名は見当たらず、また、この出典の根拠がないため信憑性に乏しい。

当調査地「ツハ山」一帯が岡氏の城の一つである逢坂城跡として比定された経緯は不明であるが、おそらく、奈良県教育委員会（檀原考古学研究所）が昭和49年に生駒郡三郷町で実施した立野城の発掘調査に伴う周辺付近一帯の城郭関連遺跡や上述した『大和葛城郡史』下巻「下田村史」等の記述から、当地が逢坂城として認知されるに至ったものと思われる。

調査者自身の見解としては、文献検索の結果からみても、逢坂と認識されている範囲を広く解釈できるのであれば、仮に逢坂城が存在したとしても逢坂城は二上山中に築造された岡城のことを示す。すなわち、岡城と逢坂城は同一のものではないかと思われる。

### (4) 岡氏と香芝市内の城郭関連遺構 (図9)

香芝市内では北から迷迎山城、七郷山城、木辻城跡、ヘモンド城跡、鈴山城跡など市内の9箇所中で世の城郭関連遺構が知られている。いずれも明確な城主が不明なものが多いが、このうち、土地柄から岡氏にかかわりのあるものと考えられるものは岡氏の岡（畑）城跡をはじめ、岡氏居館跡遺跡やヘモンド壘、二上山東方の狐井城山古墳の上に築かれた狐井城がある。

### 註 釈

- 1) a 村田修三 1998 『日本の歴史』別巻 集英社  
b 村田修三 1980 「中世史部会共同研究報告—城郭調査と戦国史研究—」『日本史研究』日本史研究会
- 2) 竹内理三 1990 『奈良県』『角川日本地名大辞典29』角川書店
- 3) 泉森紋 1976 『古墳時代』『香芝町史』香芝町役場
- 4) 朝倉弘 1993 「第二章 各論」『奈良県史』第11巻 名著出版
- 5) 奈良大学城郭研究会編 1980 「岡城」『城』第9号 奈良大学城郭研究会
- 6) 岡上漱石著 『和州諸将軍伝』豊住書店
- 7) 朝倉弘 1993 「和州国民郷土記」『奈良県史』第11巻 奈良県立図書館蔵『大和郷土記』他
- 8) 前掲註6
- 9) 奈良県北葛城郡役所編 1904 『大和北葛城郡史』下巻「第十章下田村史」
- 10) 前掲註9
- 11) 廣瀬常雄 1975 『立野城跡—生駒郡三郷町立野所在中世城郭跡の調査概報—』奈良県立檀原考古学研究所

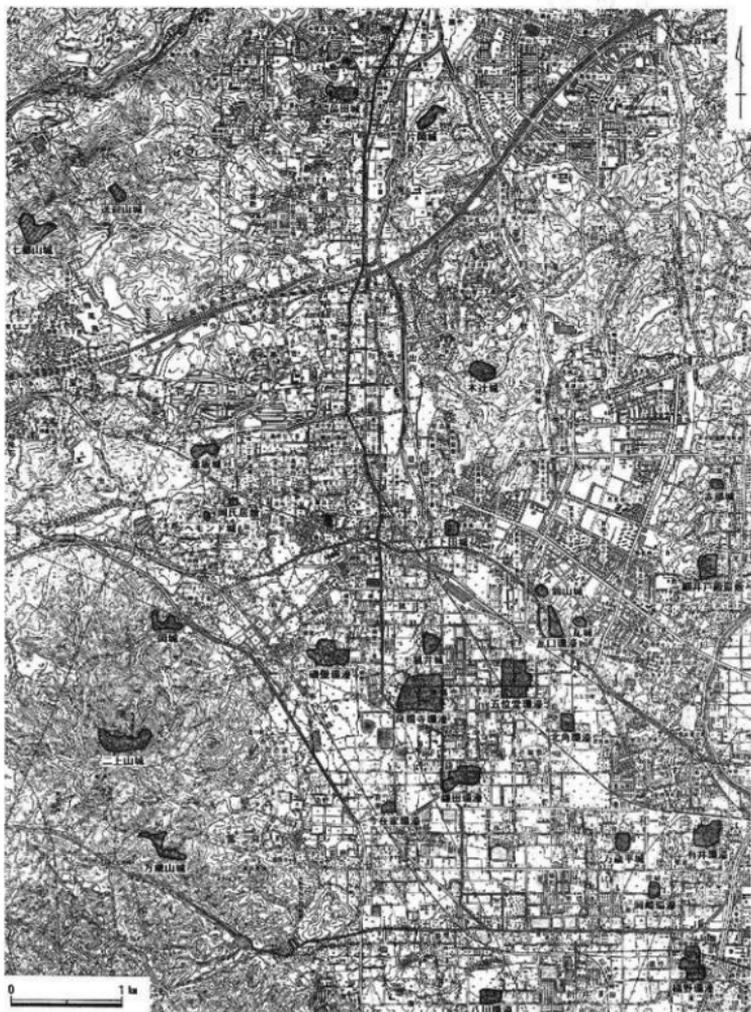


図9 香芝市周辺の城郭関連遺構・環境集落分布図

### Ⅲ 検出遺構の概要

#### 1. 層序

調査の結果、遠坂城跡の所在する丘陵の基盤層は下部の花崗岩層、中部の黄褐色砂層、上部の黄褐色砂質土層（やや粘質）の大別して3層で構成されることが識別された。全体的な傾向として下部の花崗岩の層域は標高75m以下まで、中部の黄褐色砂層の層域は標高80mまで、上部の黄褐色粘質土層の層域は標高83m以上に限られる。

標高によって基盤層が異なるため調査区の基盤層は一律ではなく、また、堆積土は全体的に総じて丘陵尾根上に位置する調査区は浅く、全調査区平均的にみて現地地表約20～30cmで地山に至る。中でも谷間に設定した第8・9調査区では土砂の堆積は厚く、堆積土は最深部で深さ約1mを測る。

#### 2. 検出遺構の概要

現地調査は、当丘陵の中で最も城郭関連遺構の存在する可能性が高い箇所と想定されていた開発事業対象地域北側の第15調査区から南端の第1調査区の北側から南側にかけて各調査区毎に順番に調査を進行した。

このうち、何らかの遺構を検出したのは第1・2・3・6・7・8・9・11・12調査区で、それ以外の第4調査区と13～15調査区では顕著な遺構を検出することはできなかった。

以下、各調査区の調査目的と検出遺構の概要を記す。

##### (1) 第1調査区 (図13、図版3・4・9)

現況で2箇所曲輪状の段築箇所がみられることから、これらの遺構の検出を主眼として設定した調査区である。

溝状遺構1基〔SD-01・02〕を検出。いずれも調査区を南北に横断する幅1m、深さ30cm前後の浅い流路跡で、溝内からは19世紀前半の陶磁器片が出土した。

##### (2) 第2調査区 (図13、図版3・4・10)

丘陵先端部の1箇所遺構の浅い落ち込みがみられることから、この遺構の浅い落ち込みの検出を主眼として設定した調査区である。

溝状遺構1基〔SD-03〕を検出。検出幅1m、深さ60cmを測る流路跡で、断面はU字型を呈する。遺物は出土していないため時期は不明。

##### (3) 第3調査区 (図13、図版3・4・11～14)

火葬墓の立地条件の一つである風水思想にかなった眺望の良い南東斜面に位置するため、火葬墓の検出を主眼として設定した調査区である。

植樹を含む土坑数十基をはじめ、調査区中央から西側を蛇行しながら横断する浅い溝状遺構1条〔SD-04〕等を検出。SD-04は、幅50cm、深さ20～30cm前後を測る流路跡で北東から南西を蛇行する。流路は灰褐色砂質土層の単一土層で奈良時代と推定される須恵器の壘体部片1点が出土しているが、詳細な時期は不明。

(4) 第6調査区 (図13、図版3・4・15)

火葬墓の立地条件の一つである南東斜面に位置するため、火葬墓の検出を主眼として設定した調査区である。

土坑数基をはじめ、溝状遺構2条〔SD-05・06〕を検出。サヌカイト製石器の剥片が出土したが遺物は出土していないため時期は不明。

(5) 第7調査区 (図13、図版3・4・16)

火葬墓の立地条件の一つである東斜面に位置するため、火葬墓の検出を主眼として設定した調査区である。

溝状遺構1条〔SD-07〕を検出。溝は幅30~50cm、深さ30cmを測り、溝内からはサヌカイト製石器の剥片の他、18世紀後半の陶磁器片が出土した。

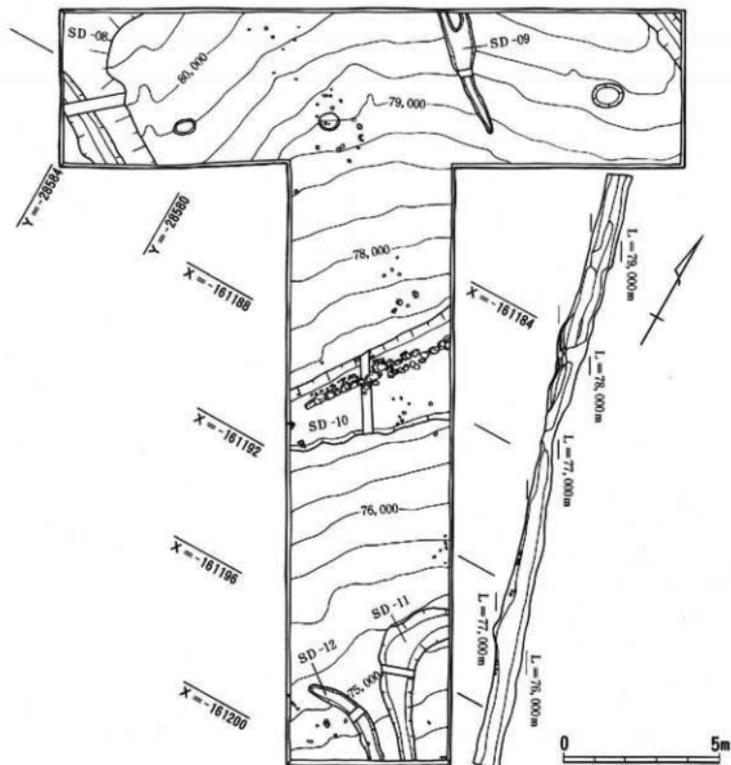


図10 第8・9調査区遺構平面図 (S=1/160)

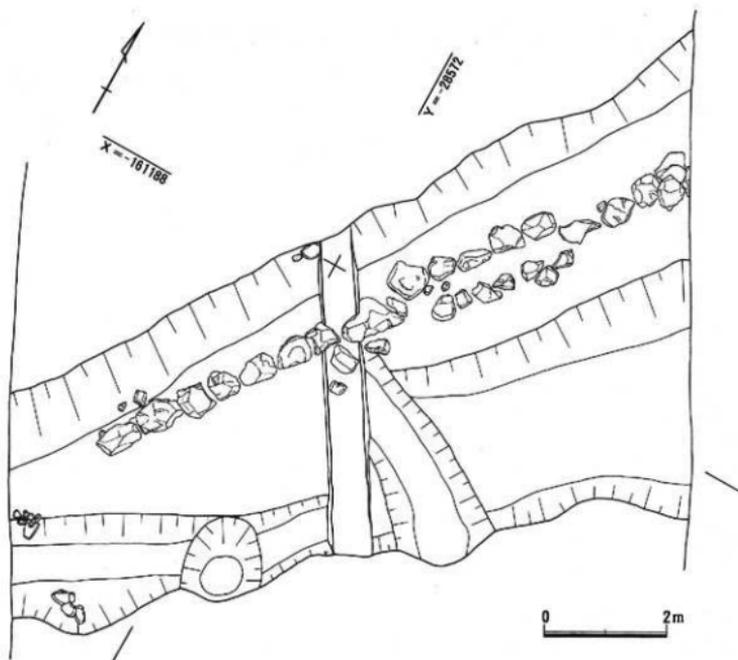


図11 第9調査区SD-10平面図 (S=1/80)

(6) 第8調査区 (図10、図版3・17)

濠跡等の城郭関連遺構や火葬墓の検出を主眼として設定した調査区である。

溝状遺構2条【SD-08・09】を検出。SD-08は、幅50cm、深さ30cmを測る断面U字形を呈する溝で、溝内からはサヌカイト製石器の剥片の他、18世紀後半の陶磁器片が出土した。

(7) 第9調査区 (図11、図版3・18~20)

濠跡等の城郭関連遺構や火葬墓の検出を主眼として設定した調査区である。

溝状遺構2条【SD-11~12】と人為的な石組暗渠を伴う溝1条【SD-10】を検出した。

SD-10は、北東から南西方向を流れる溝跡で幅3m、検出長5m、深さ30cmを測る。溝底にバラス敷の10~40cm程度の小石を敷き詰め、その上に30~50cm程度の人頭大の石を並べる丁寧な構造をもつ溝で、何らかの建物施設に伴う暗渠・排水溝と考えられる。溝内からは19世紀前半の陶磁器の土瓶の注口部の破片が出土した。

SD-11~12の溝状遺構の平均幅は0.5~1m、深さ10~30cm前後を測る。埋積土は暗灰色砂質土層の単一土層で人為的な感は少なく、自然の流路跡と考えられる。

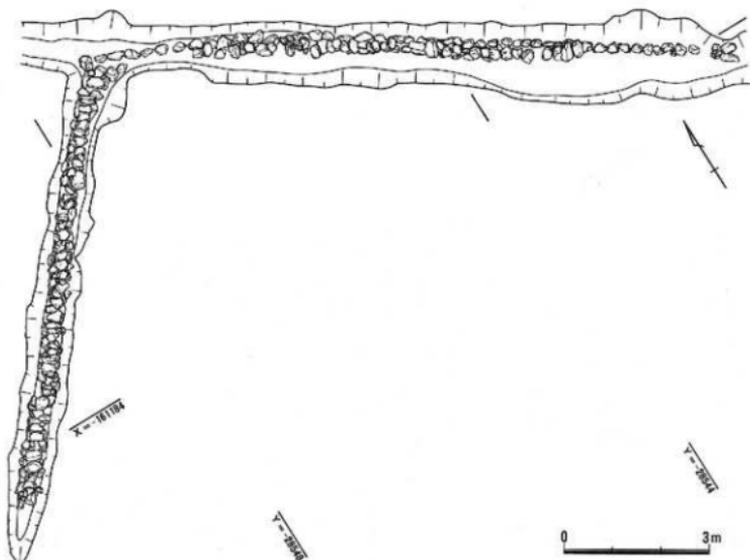


図12 第11・12調査区S D-15平面図 (S=1/100)

(8) 第11・12調査区 (図12・13、図版3・21~25)

調査前の踏査で長方形の曲輪状の段築がみられたため、城郭関連遺構の検出を主眼として設定した調査区である。溝跡4条等調査区の中でも最も多くの遺構を検出した。

(9) 第13調査区 (図15、図版3・26)

調査区南側に垂直状の落ち込みが想定されたため、これらの城郭関連遺構の検出を主眼として設定した調査区である。

調査の結果、遺構や遺物は皆無であった。

(10) 第14調査区 (図15、図版3・27)

調査前の踏査で2箇所土塁状の段築(テラス)が確認されたため、これらの土塁状の構築物の有無確認を主眼として設定した調査区である。

調査の結果、ほぼ現況どおりの段状の地形を検出したが、漆跡を検出することはできなかった。

(11) 第15調査区 (図15、図版3・28~30)

調査前の踏査で3箇所で比高差1m前後の低い土塁状の段築(テラス)が確認されたため、これらの土塁状の構築物の有無確認を主眼として設定した調査区である。

調査の結果、ほぼ現況どおりの段状の地形を検出し、一段めの土塁状の段築箇所幅30cm、深さ40cmの溝跡を検出したが、この溝は耕作や土地の境界設定に伴う溝である可能性が高く、各段築箇所で城郭に伴う漆跡を検出することはできなかった。

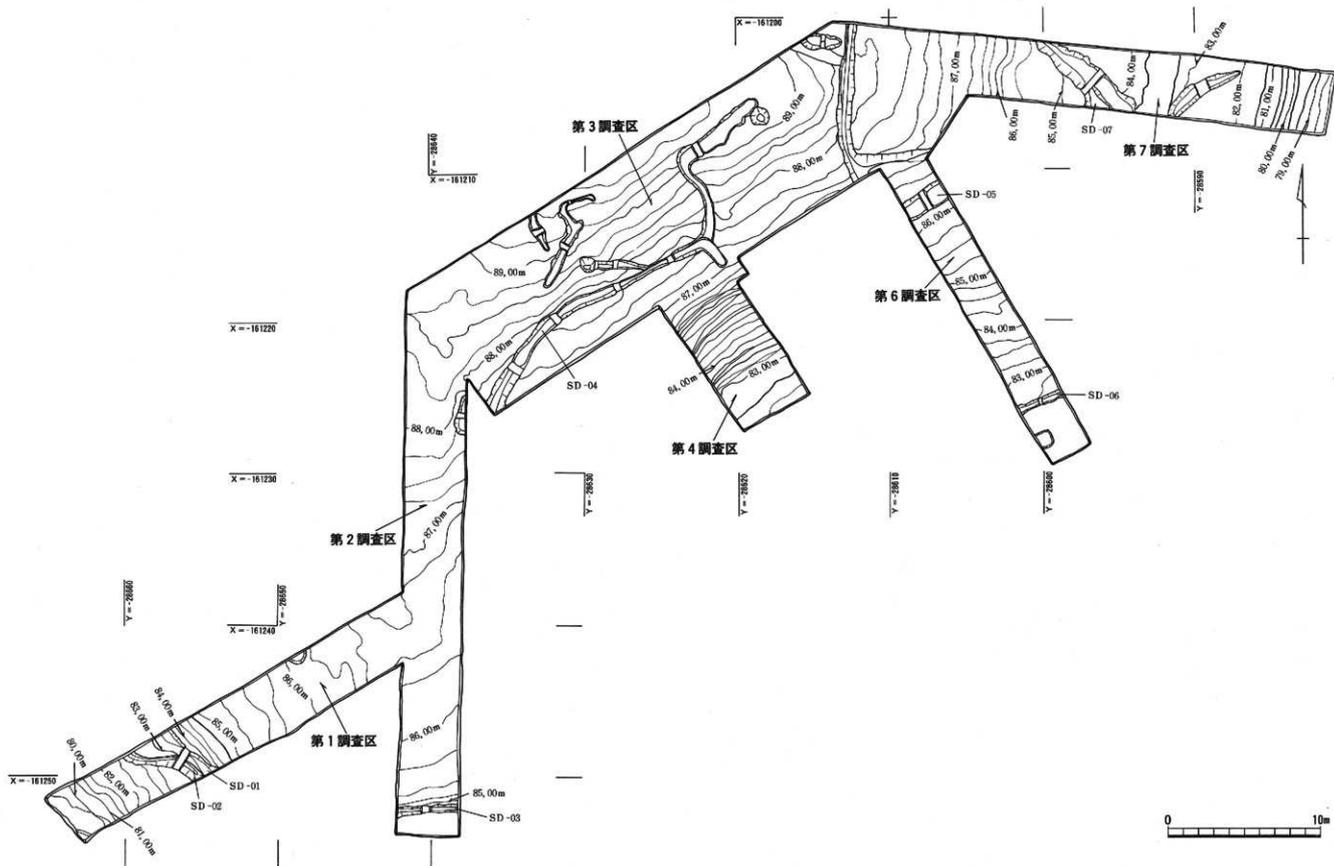


图13 逢坂城路第1~7調査区遺構平面図 (S=1/250)

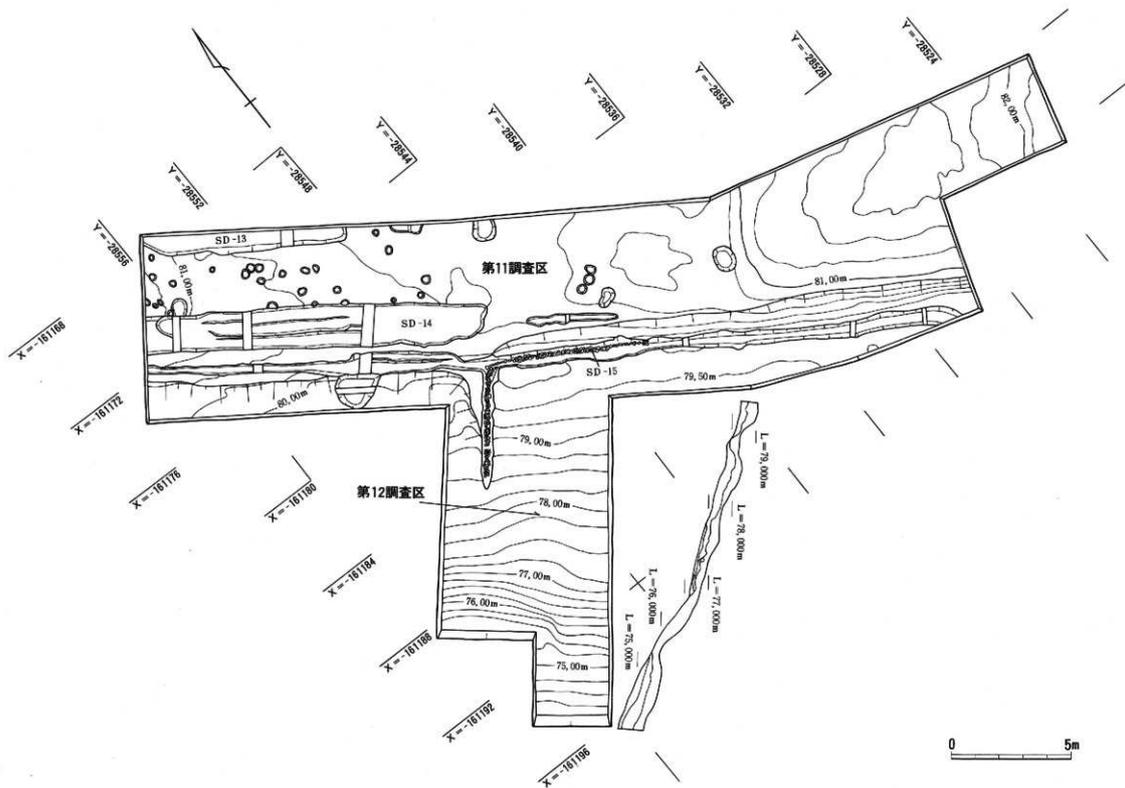


图14 遼北城跡第11・12調査区遺構平面図 (S=1/160)

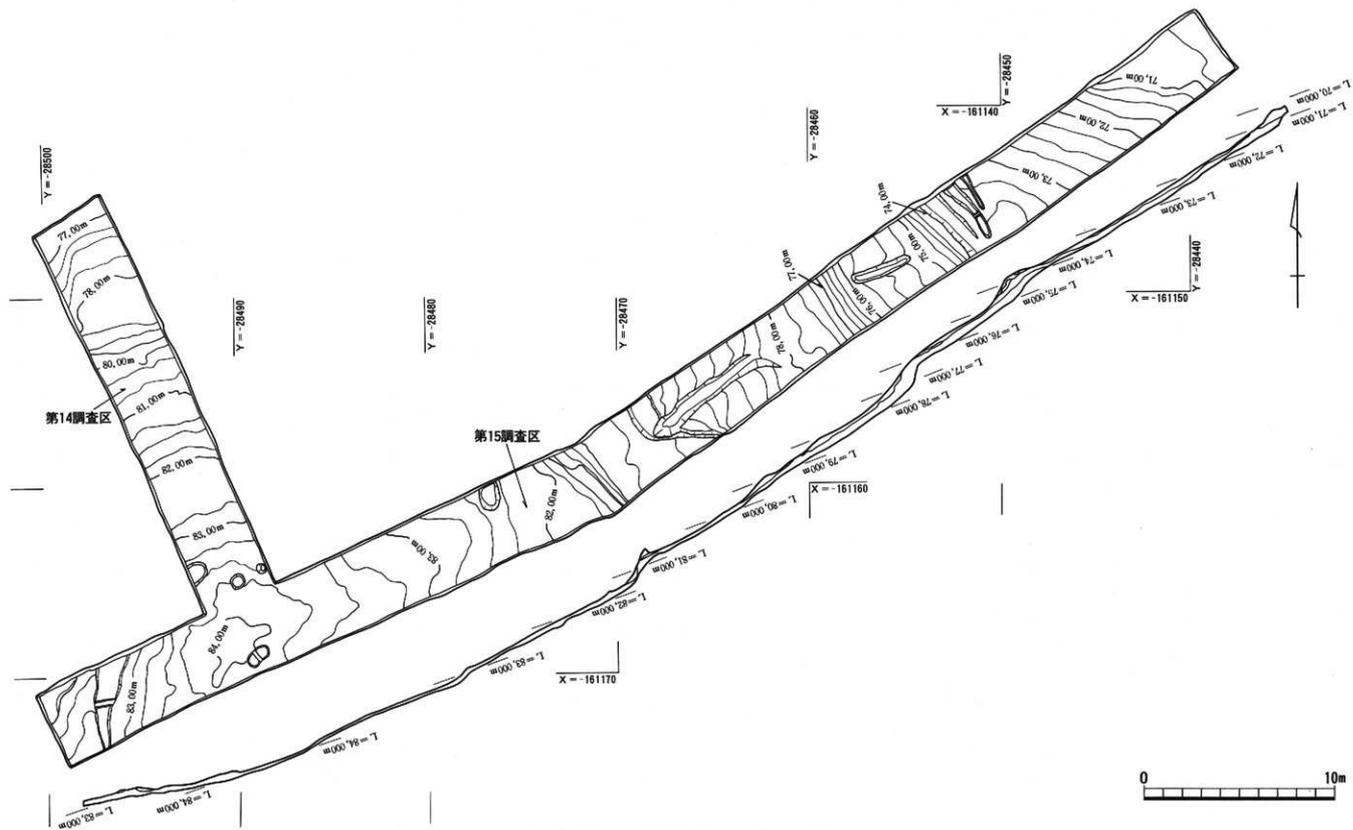


图15 浅坡城跡第14・15調査区遺構平面図 (S=1/200)

## IV 出土遺物の概要

### 1. 出土遺物の概要

各調査区の堆積土中や遺構からはサヌカイト製石器の剥片や近世の陶磁器の破片が出土している。出土土器は、古代の土器片は第3調査区のSD-04で検出した奈良時代の須恵器1点に過ぎず、その大半が16世紀末～19世紀前半に亘る江戸時代を中心とする近世の所産のものである。

#### (1) サヌカイト

とくにサヌカイト製石器の剥片は丘陵中央部から西側に設定した第3～8調査区に集中して分布する傾向があり、東方の調査区に向かうにつれてその包含量は減少する傾向がある。なかでも、サヌカイト製石器の剥片が最も多く散布していたのは丘陵の谷間に位置する第7・8調査区で、丘陵上方からの流入土層である堆積土中に多く含まれていた。

いずれも破片であり、石器の完成品や製作途上の半製品は皆無であるが、石器の剥片の形状から、おおむね、弥生時代を中心とした石器生産に伴うものと考えられる。原石を産出しない層域が広がる当丘陵域にサヌカイト製石器の剥片が分布することは不自然であり、おそらく、丘陵上方に何らかのサヌカイト製石器の生産遺跡が存在する可能性が考えられる。

#### (2) 土器 (図16)

江戸時代の近世土器は、石組暗渠等の近世遺構が検出された第8～10調査区に最も多く分布しており、建物の性格については不明であるが、付近に一時的に何らかの建物跡が存在した可能性が考えられる。出土土器の時期は大別して16世紀末～17世紀初頭、18世紀後半、19世紀後半の3時期に分けられる。以下、出土土器の概要について調査区ごとに概観することとする。

##### 【第1調査区出土土器】(図16-1～4)

1は土師質焼物の口縁部である。土中に多くの雲母を含むのが特徴的である。内面には煤が付着する。

3は天目茶碗の底部である。底部径4.4cmを測る。

4は磁器染付碗である。底部を欠失する。底部径10.8cmを測り、外面にはコンニャク印判による単花文を配する。

##### 【第2調査区出土土器】(図16-5)

5は唐津焼?の皿の底部である。復元高台径は7cmを測る。

##### 【第3調査区出土土器】(図16-6)

6は肥前磁器染付碗である。文様は、外面にごくブリミティブな一重網目文を縁がかかった呉須で描く。

##### 【第6調査区出土土器】(図16-7・14・20)

7は瓦質鉢の破片である。口縁部内面直下には櫛描(6条)の波状文が施される。

14は瓦質鉢の破片である。口縁部内面直下には櫛描(4条)の波状文が施される。

20は楕鉢の底部の破片である。復元底部径は11.4cmを測る。

##### 【第8調査区出土土器】(図16-8～13・15～17)

8は楕鉢の口縁部破片である。口縁部内面直下には櫛描波状文が施される。

9は土瓶の灰釉陶器蓋の破片である。施釉は外面のみで内面は無釉である。復元口径10.6cmを測る。

10は土瓶の底部と思われる。

11は肥前系磁器染付碗である。やや粗製で、口径8.8cm、器高5.1cm、高台径5.1cmを測る。外面にはコンニャク印判による草花文を配する。文様は、外面にごくプリミティブな一重網目文を縁がかった具須で描く。

12は磁器染付碗の底部である。復元口径4.1cmを測る。

13は土瓶の口である。

15は底部である。底径は11.4cmを測る。

16は瀬戸（肥前系統）磁器染付碗の底部である。高台径3.8cmを測る。

17は常滑系の甕体部破片である。内面にも鉄釉が及ぶ。

**【第9調査区出土土器】**（図16-22）

22は瓦質土器の口縁部の破片である。

**【第11調査区出土土器】**（図16-21・23-25）

21は鉄釉陶器甕である。23は肥前磁器染付碗である。文様は四方樺文を描く。25は土瓶の口縁部である。

これらの土器の帰属時期は、おおむね、18世紀後半のものとしては4・11・12・19・22・23等が、19世紀後半の幕末のものは9・10・13・14・25等が該当する。また、19世紀後半のものは14・9・10等がある。

## 2. 出土遺物からみた逢坂城

上記のとおり、今回の調査で出土した土器のうち、時的に最も古いのは16世紀末～17世紀初頭のものである。調査地から出土した土器は、文献から岡氏一族の興隆年代や岡氏一族の没年代が1580年と考えると、いずれも岡氏の存続年代以降のものであり、岡氏の存続時期の遺物は一点もみられなかったことから、遺物からみても当丘陵上に岡氏の城郭に関わる遺構が存在した可能性は低いものと考えられる。

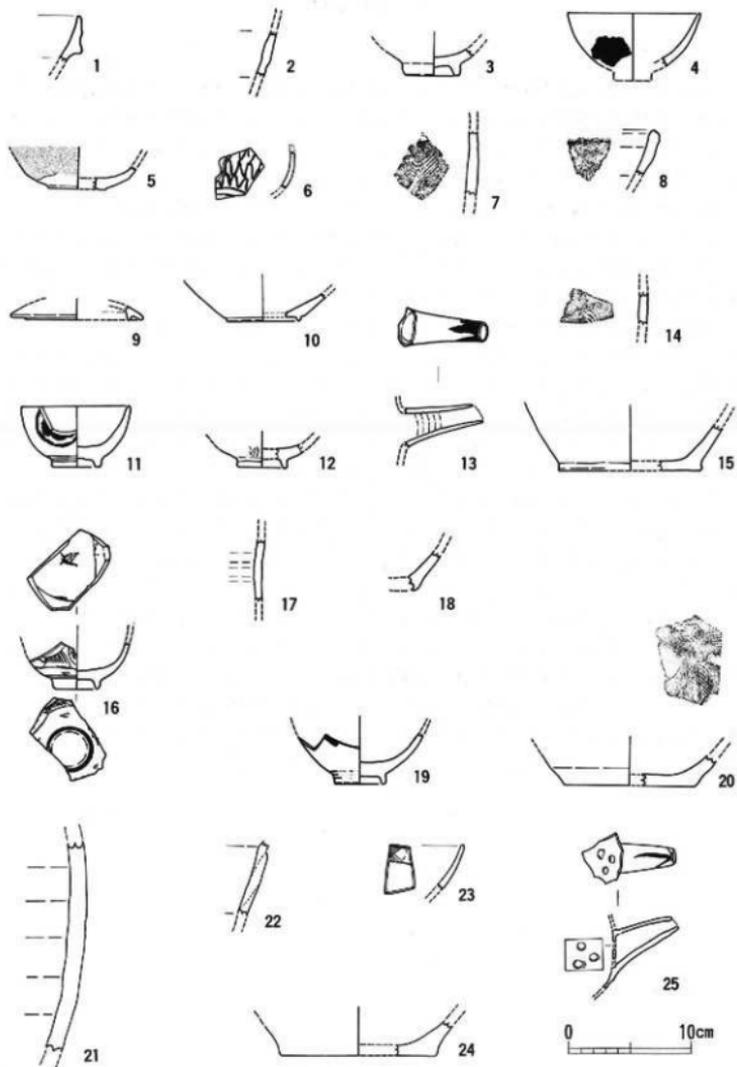


图16 濠板城跡出土土器 (S=1/4)

## V まとめ

江戸時代の遺構や遺物を検出したものの、当初予想された濠跡や土塁、曲輪等の戦国期の争乱を物語る城郭関連遺構は検出することはできなかった。また、出土遺物はいずれも岡氏一族の生存・存続時期（12世紀後半～16世紀中頃）以降のものであり、遺構や遺物からみても当丘陵上に城郭に関わる遺構が存在した可能性は低いものと考えられる。

城郭関連遺構は検出されなかったものの、当地域でもサヌカイト製石器の剥片が出土した。これまで一連の中和幹線建設事業に伴って当調査地の西方で実施した田尻峠第1～3地点遺跡や郡ヶ池遺跡の調査でも石器生産に伴う多くのサヌカイト製石器の剥片が出土しており、その生産域は当丘陵域にまでも及ぶことを確認することができた。

田尻峠第1～3地点遺跡や郡ヶ池遺跡のサヌカイトの出土量には及ばないものの、いずれもサヌカイト製石器の原石は当丘陵域の地層からは包含・産出しなものであり、原産地から意図的に当地に搬入し、加工されたものと考えられる。当調査地では近・現代の植樹・開墾に伴う地形の削平・改変が著しく、また、丘陵尾根頂部から外れた斜面上に立地するせいか、いずれも原位置を離れた遊離品ばかりであり、純粋な包含層や当該時期の遺構は未検出であったが、真上の丘陵頂部に石器生産に伴う何らかの遺構が存在した可能性が考えられる。

今回の発掘調査を含め、これまで実施した一連の中和幹線建設事業に伴う数次の埋蔵文化財発掘調査の結果から、サヌカイト製石器の分布量は、丘陵域の西方に向かうにつれて次第に少くなる傾向があり、当丘陵域が二上山北麓の丘陵上に立地する石器生産遺跡群の中でもその西端と考えられる。

以上、当地には逢坂城跡等の城郭に伴う遺構が存在する可能性は低いことが明らかとなった。しかし、付近の岡（畑）城では大規模な濠跡や曲輪状の遺構が遺存しているをはじめ、穴虫集落内のヘモンド墓や逢坂集落内の岡氏居館跡遺跡等の岡氏に関わる多くの城郭関連遺構が分布している。いずれも発掘調査の進展しているものはなく、詳細は不明であるが、城郭関連遺構の真偽は発掘調査に委ねる他はないのであり、今後、城郭関連遺構の予想される地域での綿密な分布踏査をはじめ、文献史料も含めて慎重に調査を進めて行く必要がある。

# 写真図版



1. 逢坂城跡周辺上空航空写真（北西上空から）



2. 逢坂城跡周辺上空航空写真（南東上空から）



1. 逢坂城跡  
上空航空写真  
(北西上空から)



2. 逢坂城跡上空航空写真(南東上空から)



1. 逢坂城跡上空航空写真（真上から）



1. 逢坂城跡上空航空写真(南東上空から)



2. 逢坂城跡上空航空写真(真上から)



1. 逢坂城跡上空航空写真（北東上空から）



2. 逢坂城跡上空航空写真（西上空から）



3. 逢坂城跡上空航空写真（南西上空から）



1. 逢坂城跡上空航空写真（南上空から）



2. 逢坂城跡上空航空写真（南上空から）



1. 逢坂城跡上空航空写真（真上上空から）



2. 逢坂城跡上空航空写真（南東上空から）



3. 逢坂城跡上空航空写真（北西上空から）



1. 調査地遠景  
(北から)



2. 逢坂城跡より  
二上山・ヘモ  
ンド塁を望む  
(北から)



3. 岡城より調査地  
(逢坂城跡)を  
望む(南から)



1. 第1調査区完掘  
状況(南西から)



2. 第1調査区完掘  
状況(南東から)



3. 第1調査区  
SD-10  
完掘状況  
(南東から)



1. 第2調査区完掘  
状況(南から)



2. 第1・2調査区完掘  
状況(南から)



3. 第2調査区西壁  
土層堆積状況  
(東から)



1. 第3・4調査区  
調査前伐採後の  
状況（南東から）



2. 第3・4調査区  
調査前伐採後の  
状況（南西から）



3. 第3調査区発掘  
調査の状況  
（北東から）



1. 第3調査区遺構  
検出状況  
(南西から)



2. 第3・4調査区  
遺構完掘状況  
(南東から)



3. 第3・4調査区  
遺構完掘状況  
(南西から)



1. 第3調査区遺構  
完掘状況  
(南東から)



2. 第3・4調査区  
遺構完掘状況  
(南西から)



3. 第3・4調査区  
遺構完掘状況  
(北東から)



1. 第3調査区  
SD-01  
完掘状況  
(北東から)



2. 第3調査区  
SD-01  
土層半掘状況  
(南西から)



3. 第3調査区  
土坑完掘状況  
(北東から)



1. 第6調査区  
調査前伐採後の  
状況(北西から)



2. 第6調査区  
発掘調査の状況  
(北西から)



3. 第6調査区完掘  
状況(南東から)



1. 第7調査区  
調査前伐採後の  
状況（西から）



2. 第7調査区完掘  
状況（東から）



3. 第7調査区北壁  
土層堆積状況  
（南から）



1. 第8・9調査区  
調査前伐採後の  
状況(北東から)



2. 第8調査区完掘  
状況(北東から)



3. 第8調査区  
SD-08  
完掘状況  
(南東から)



1. 第9調査区  
全景(南東から)



2. 第9調査区  
SD-11・12  
完掘状況  
(南東から)



3. 第9調査区北壁  
土層堆積状況  
(南東から)



1. 第9調査区  
SD-10  
遺構検出状況  
(北東から)



2. 第9調査区  
SD-10完掘  
状況(北東から)



3. 第9調査区  
SD-10完掘  
状況(南東から)